Seeing is believing.　百聞は一見にしかず

若柳　佳代子

出発まで

『私も尼崎市青年使節団とともにアウクスブルクへ行く!?』という話が出てきたのは、今回の訪問の１年くらい前。そして、行くことが決まったのは、令和８年度に入ってすぐのことだった。およそ15年ぶりの海外、体力に不安を感じ始めた年代での海外、スマホを持って行く初めての海外、家族に留守を頼んでの海外と、何もかもが今までにない状況だった。そのため、出発までのほぼ１年間は緊張と不安の中にいた。

到着してしまえば…

途中、飛行機の乗り換えにかかる待ち時間が長かったこともあり、出発してからほぼ１日かけてミュンヘンに着いた。入国審査も時間がかからず、アウクスブルク市の担当者にもすぐに会えた。これから数日お世話になるバスにも乗車した。ふうっ、無事にここまでたどり着けたのだから、大丈夫！今からは確実に、素晴らしいことばかりが待っているのだから。ようやく、緊張と不安の９割が解消された。

空はこんなに広いのか

ミュンヘンからアウクスブルクへ移動するバスの中から見る景色は、視界の下半分は木や草地の緑色で、上半分は空の水色、そんな景色がずっと続いていた。それは、４日目のフュッセンとノイシュヴァンシュタイン城への道中も、５日目のダッハウ強制収容所とミュンヘンへの道中も同じように感じた。空が大きく開けた空間はなんて穏やかなのだろう。

まちが美しい

アウクスブルクのまちを歩いていても、目線の高さは建物、少し目線を上げるだけで、空の水色。やっぱり、空が近く、広く感じる。そうか、建物が高くないのか。だから、アウクスブルクのまちは美しく映るのか。

私はほとんど景色の写真を撮らない。後から見返しても、『あの時、この目で見たのとなんか違うんだよなぁ』と気持ちが冷めてしまうことがよくあるから。しかし、今回は少し違った。まちが美しい。写真に残したくなる。帰国してからしばらく経った今でも、まちの写真を見返している。そして、何度も見返して気がついた。アウクスブルクのまちの美しさは高さだけじゃない。建物の壁面がぴったりと道路に沿っているんだ！建物一つひとつ、窓の形も、壁面の色も、屋根の形も違って、それぞれ個性があるけれど、出しゃばって道路にはみ出す建物も、反対に気弱に引っ込んでいる建物も、ひとつもない。建物はすべて同じ線上に建っている。それが、整然とした美しい景観をつくっている。我ながらひらめいたと思って、AIに質問したところ、『はい、その通りです。建物の高さが揃い、壁面が道路（敷地境界）に隙間なく連続していることは、ヨーロッパの街並みが美しく感じられる大きな要因の１つです。』。なんだ、AIはとっくに知っていたよ。

広いっ

出発前に大阪・神戸ドイツ総領事館のドイツについてのレクチャーで知ったのは、日本とドイツの国土面積はほぼ同じで、人口は日本が1億2300万人、ドイツが8350万人ということ。また、アウクスブルク滞在中の通訳ガイドの説明では、国土面積に対する居住面積の割合は、日本は10%ほど、ドイツは90%らしい(検索すると、『実際に人間が住んだり利用できる土地の広さは、ドイツの方が日本を大きく上回る（約2.3倍)』というような記述が多いです)。さらに、尼崎市の面積は約50㎢で人口約45万人、アウクスブルク市の面積は約147㎢で人口約30万人。いくら数字を並べて比較しても実感がわかないけれど、バスからの景色を見て、まちを歩いて、平面的な広がりがはっきり見えた。そもそも、ドイツに着いてはじめて降り立ったオクトーバーフェストの会場ひとつとっても、学校の体育館よりもずっと広い。ビール祭りとはいえ、この広さ。ランチタイムだったので、人はまばらだったけれど、満席だったら、この会場の盛り上がりは一体どんなものだろう?

Seeing is believing.百聞は一見にしかず

今回のアウクスブルク市を訪問して、最も強く感じたこと。

まず、メールだけでやり取りをしていただけのアウクスブルク市の担当者と、アウクスブルク市にとってもうひとつの姉妹都市である長浜市の担当者と対面して話ができたのは大きなことだった。メールも、オンラインミーティングも便利なツールだけど、会って話せば、とにかく話が早い。そんなことは、すでに誰もが実感していることだけれど、海も国境も越えて、2者ならともかく、3者が顔を合わせられるなんて簡単じゃない。この機会を逃さず、実務的なことだけでなく聞きたかったことについても話すことができた。それにより、薄々感じていたけれど確証が持てずにいたことも含め、私が気づいていなかったこと、見えていなかったことが見えてきた。机上の想像が、現場の実感に変わった。

毎日毎日、実際に訪れて、歩いて、見て、お会いして、一つひとつに『こういうことだったんだ』と合点がいった。例えば、表敬訪問や送別会の会場がどんなところなのか、夕食を共にしてくれる方々はどんな人たちなのか、など。特に、給水塔とセントエリザベス職業訓練センターは印象深かった。

私たちが見学した給水塔を含むアウクスブルクの水管理システムは世界遺産に登録されている。さほど大きくもない給水塔だけを見て、世界遺産に登録…?と不思議に思っていたのだけど、勉強不足なだけだった。私がこの水管理システムを手短に説明するのは至難の業だけど、アウクスブルクでは、すでに15世紀には飲用水とそれ以外の水を分ける仕組みが整えられていた。水は、傾斜のあるアウクスブルクの地形と水を汲み上げる技術を利用して、市内に張りめぐらされた水路で各所に届けられた。なんて、よく考えられたシステムだろう！それだけでなく、まちなかの噴水への給水もこのシステムを使っていたらしい。

そういえば、まちなかのそこら中に水路を見かけて、『結構水流が激しいな』と思っていた。せせらぎなんて優雅なものでは

なく、場所によっては大雨の翌日の用水路くらい。思わず、『誤って水路に落ちてしまうとか、興奮した人が飛び込んだ、なんてニュースがあったりする?』と、歩きながらアウクスブルクの担当者に聞いたら、返事は『NO』だった。愚問…。噴水に使うのなら、これくらいの強さの水流は必要だろうなぁ。

水管理システムについて知ってから、先に述べた整然とした建物や道路の景観にこの水路が加わり、アウクスブルクのまちに独特の雰囲気を感じた。

もうひとつ、印象深かったセントエリザベス職業訓練センター。ここは、それぞれに事情がある若者のための職業訓練施設で、私たちは、園芸や木工、衣服のクリーニングなどの現場を見学した。先生も生徒たちもみんな明るくて気さくな人たちだった。私たちの訪問に興味を示してくれて、『どうしてドイツに来たの？』と聞いてくるほどだった。

この日の昼食は生徒たちが作ったメニューを、生徒たちの serve(配膳)でいただいた。料理も serve もレストランのサービスとそん色なくて、彼らのこれまでの訓練の成果や気持ちが感じられて、格別においしかった。

職業訓練センターがプログラムに含まれているのはどういう意図だろうと思っていた。その質問はしなかったけれど、尼崎市青年使節団の団員と同年代の若者が、社会に出るためにこうして頑張っている姿を見せていただくのは、団員全員にとって大きな刺激や励みになると思った。そして、職業訓練センターの敷地内でも空が近くて広く感じて、こんなところで学べるのがうらやましかった。

本当に素晴らしい日々だったよね

人生の半分を過ぎた私には、もはや、新たに刺激を受ける機会はないから、若い団員にとってこの先の人生の糧になるように、ぬかりなく準備するのみと思っていた。とはいえ、冒頭に述べたように、実は自分自身も緊張していたから、なんだかもう、恥ずかしいくらいに必死なだけで、ぬかりない準備ができたかどうかは怪しい。だけど、団員にとっては、間違いなく人生の糧になったと思う。なぜなら、毎日、私たちの日常にはない様々なものを見て、聞いたからだ。そして、みな、ホストファミリーとの交流に恵まれた。多少苦労したり、期待外れに感じたりしたこともあったかもしれない。けれど、そのすべてが、はるばるアウクスブルクまで来たからこその経験だ。

送別会では私たちの出し物を十分にやり切って、会場のみなさまに楽しんでもらえて、感謝も伝えられたと思う。リハーサルまでは少し心配だったけれど、団長と団員たちが一緒になって段取りし始めた途端、頼もしく見えた。いざ本番では、私が立っていた近くのテーブルでは、二択クイズの答えはどちらだろうと、わいわい盛り上がっていたし、折り紙も夢中で折っていた。紙飛行機を飛ばしては、愉快だと大笑いしていた。Wunderbar!

帰国して２週間ほどたった頃、『現実に戻って、もう、興奮は冷めてきたでしょう』と言われたことがあった。いやいや、この興奮は一生ものです。私の人生、まだ半分残っているのでね、団員と同様、人生

の糧でございます。

百聞は一見にしかず、とはまさに今回のことだ。アウクスブルクに足を運んだことで多くを知ることができ、私はこのまちの素晴らしさを具体的に伝えられるようになったはずだ。たくさんの尼崎の若者がアウクスブルクを訪れ、たくさんのアウクスブルクの若者を尼崎に迎えられるよう、いい仕事をしていきたい。

無事にすべての日程を終えられたのは、団員のみんなが元気でいてくれたおかげ。ありがとう。そして、私たちを受け入れるために１年ほどかけて準備してくださったアウクスブルク市の担当者の方々、出発前にドイツについて教えてくださった大阪・神戸ドイツ総領事館の方々、毎晩の夕食を一緒に過ごしてくださった方々、各視察先で私たちを心待ちにし、案内してくださった方々、５日目のプログラムを支援してくださった山岡記念財団さま、この上ないプロフェッショナルな通訳をしてくださった方々、『アウクスブルクに行くべきだよ！』と送り出してくださった職場の方々、本当にありがとうございました。

アウクスブルクの方々とは、いつかまた会える日があればと願っています。



ヴェース教会の裏側に広がる景色



建物の並びとまちなかの水路



セントエリザベス職業訓練センター
歓迎のテーブルデコレーション